『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題　六

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題五」（愛知県立大学文学部論集　国文学科編第五三号平成一七年三月発行）につづくものである。

凡例

一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。

二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。

1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。

2、丁付けは省いた。

3、曲中に付した〈・シテ・アト・――等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（）で括って示した。

4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。
　　七七→喜　厂・鳫→雁　〆→シメ　ゟ→より
6、宛字も多くみられるが、そのままとした。
　　竹類（畜類）　御行所（御教書）　字文（呪文）

翻刻

髭　櫓

〳〵是は此当り洛中ニ住居する者て御座る　天下納り目出度御代なれは禁中にたいしやうゑを行ハせらるゝ　それニ付さいの鉾にハ大髭の役なれハ洛中を色〻とせんさくなさるれとも某まさつた大髭はないとあつて此役を被仰付た　先女共を呼出シ申聞せ悦ハせうと存る（楽屋ヲムキ）　女共おいやるか　居さしますか　〳〵童を呼ハせらるゝハそふな呼はせらるゝハ何事て御さる　〳〵ちと其方ニ悦す事かある　先こふとをらしませ　〳〵心得ました　夫ハ何て御さる　〳〵別の事てもない　天下大平ニ納り目出度御代なれハ禁中ニ大掌（ママ）会を行ハせらるゝ　夫ニ付て才の鉾には大髭の役なれハ洛中色〻とおたつねなさるれ共大髭かないと有て則チ此役を身共ニ被仰付たか覚へといゝ又ハ外聞と言此様な嬉敷い事ハなひ　其方も悦こはしませ　〳〵扨〳〵夫ハ目出度事て御さる　夫ニ付て装束の拵をしておくりやろうす　髭のせうやくもしてくれさしませ　〳〵成程心得ました　していつの事て御さる　〳〵明日の事ちや　〳〵のふ興怱や〳〵　此様な事ハ前広（ヒロ）からいふてさへも出来かぬる物ちやニ明日の事を今言ふて何と成物て御さるそ　〳〵といふても拵をせねわならぬ　とうあらふ共拵をしておくりやれ　〳〵またいわせらるゝ　急に言ふてハなりませぬ

程に是ハ断をいわせられ　〳〵イヤ爰な者か　そちか何も知らぬニ依てちや　何とかる〳〵しう断かいわるゝ物ちや
とう有ても拵をせい　〳〵何程言ハせられてもなりませぬ　其上此方ハ其髭(ヒケ)をしまんにさせらるれとも辺りてハ皆
笑ひ升す　其髭をそらしませ　また其つれをいう　此髭かあれハ社此度の大切な役を被仰付るれ辺りて笑ふかとふあ
らうか大事の髭をそる事は思ひもよらぬ事ちや　〳〵イヤ〳〵童も朝夕しやうやくにあきはてた　とふ有ふ共是を幸
にそらせられい　〳〵扨〳〵悪ひやつの　何程身共(ナニホドでも)　髭をそる事ハならぬ　夫程身共か髭にあいたらハ出て隙(ニニ)をやろ
う　出て行ケ　出て行ケならハ出ても行ませうか跡て悔まし升な　そちにひまをやった迚テ何の悔もうそ　出て行か
ぬか〳〵(女ヲタミク入違タミキダス)　是ハ何とさせらるゝ　アイタ〳〵　ヤイ〳〵　童をちやうちやくしたそよ　〳〵ちよふちや
くしたか何んちや　〳〵今日ニ物を見せうそ　〳〵また其つれをいふ　出て行かぬか　〳〵　エイ腹立や〳〵(女中入スル)
〳〵笑テ　やれ〳〵女共に隙をやつて幸の事ちや(下ニ居ル)　〳〵ヤア〳〵それハ誠か　扨ミ気の毒な事ちや　先急
て知らせてやらう　ヤア是〳〵のふそこな人　あわたゝしひ何事ちや　〳〵そなたハいこうゆたかにしておいやるか
聞ハ其方ハお内儀ニいとまをやつて其上ちやうちやくおしやつたけな　殊外腹を立て辺りの女房をかたらうて押寄て
来て夫故しらせに来た　用心のおしやれ　〳〵ア、爰な人か物をぎやうさんニおしやる　日頃分別もある人ちやと思
ふたかあの女童か押寄せて来たと有て何程の事かある物そ　〳〵扨〳〵おぬしハわるい合点ちや　そういわす共用意
さしませ　〳〵気遣ひさせらるゝな　身共か仕様か御座る　〳〵またゆたかな事をいわし升　とう有ても大勢ニハか
たれまい　平ニこしらへをさしませ　〳〵すれは大勢来まするか　〳〵中〳〵　〳〵夫ならハ女ちやといふてもあな
とられぬ　そなたよひよふニして被下(大小前ニテヤクラカケル)　髭をぬかふといふ事ちや　是をこふしてふせがしませ
(シカ〳〵立テ右ノカタヌク)　〳〵身共ハふせこう　跡をくろめてくれさしませ　〳〵心得た(入ル後女立衆一セイニテ出ル)　〳〵きう代の髭の廻
りのよふかいニハ四方八丁ニ堀をほり瀬戸髭迄もこしらへてよするかたきを待かけたり　〳〵に世まてちきりしかひ
もあら磯によせてうちとれ浦のなみ　〳〵きう代の髭の周りのよふかひニハ矢櫓かひだてあけたるそや　か、れや
〳〵女とも　あらもの〳〵し和男よ〳〵　多勢にひとりかかのふへきか　あらつらにくや〳〵　たとへ女ハ多くとも

たとへ女ハ大儀のとらの尾はふむとも龍の髭ハよもぬかし　〳〵たかひのもんとうむやくなり　髭をむしつてくれんとて切先をそろへてかゝりけり　〳〵爰ハのかれぬ処なり〳〵とて城の戸ひらを押開き　口の内より切て出たてさまきり横さまきり二切て廻れハさすか女のかなしさわこらへすはつとそにけたりける〳〵　〳〵ヱイ〳〵ウヲヽ　〳〵其時女房腹を立て〳〵只かいたてを引破れとてくまてなひ鎌打懸てゑひや〳〵と引たりけり　〳〵すハ〳〵此髭ぬけそうなハすわ〳〵此髭ぬけかゝるとて爰やかしこをふせげとも多勢ニふ勢かなハすして貝たて櫓を引おとされハ大せいばつとよりさはかりまんする大髭を大きなけぬきてはさみ持〳〵ねなからくつとそぬきニける　ヱイ〳〵ウヲヽ

シテ　大臣エホシ　素袍　少刀　ヒケ
女　後太刀ハク　ヤクラ首ニカケル
如常　後大臣エホシキル右ノカタヌク
女立衆　同断　クマテナト七ツ道具持
教へ人　半上下
作り物　ヤクラアントウノカサホトニ四角ニ竹ニテ作ル前ニ戸ヒラカナ物紋ナトカク前ニノホリフキヌキタテルモンカクモヨシウシロニハシキヲツケ首ニカケル

川上

〳〵吉野ゝ里に住居する者て御さる　某拾ケ年以前より眼をやんて御さるかいか成宿業にやか様ニ盲目と成て御さる　又承ハ川上の御地蔵へきせい申せハたちまち開目させて被下るゝと皆人おしやる程に今日ハ川上の御地蔵へ参つてきせいをかけよふと存る　先女共を呼出し申聞ふ　のふ〳〵是の人お居やるか居さし升か　〳〵童を呼はせらるゝハ何事て御座るそ　〳〵其方を呼出ス別の事てない　某のよふに久敷う目のハるいを其方も嘸苦労に思わるゝて有ふ

のふ　扨〳〵今めかしい事を被仰るゝ何にしに苦労に思ひませうそ　此方の嘸そふ自由に有うと思ふて是のみ気の毒に思ひ升る　夫ニ付御地蔵へきせい申ハたちまち開目させて被下るゝと皆人おしやる　今日ハ御地蔵へ参ふと思ふか何と有ふそ　いかにも能御座ろふか乍去此方の目か五年や三年の事てハ御さらぬ　最早拾ケ年ニも余る目か何として明物て御さらふそ　御無用ニ被成　イヤ〳〵夫は此方の悪ひ合点ちや　薬を呑とハ違ふて是ハ御地蔵の御利生て明く事なれハ年の遠い近いニわよらぬ筈ちや　是悲共参ふと思ふ　夫程思わせらるゝ事ならハいかにも参らせられ　童か手を引て行ませう　イヤ〳〵そなたハ内に居イてハ心元ない　其方ハ留主をおしやれ　そふあらハ心得ました　杖を進しませう　よかろうくれさしませ　のふ〳〵お杖て御さる　とれ〳〵　扨参つてこふ程によふ留主をおしやれ　目出とふ頓而帰らせられ　さらハ〳〵　扨〳〵身共か女共をほむるハ如何なれともあの様な深切な者ハ御さらぬ　誠ニ某の様に年久敷う目をやむにあきはてたかと思ふて色〳〵心を付て見るに少も其心ハのふて朝夕苦に致て何角と看病をいたいてくるゝに依て悦ふ事て御さる（ト言テシテ柱ニテ）ヤ殊外賑やかな事ちや　イヤ申ちと物か御尋申とふ御さる　川上御地蔵へハこふ参るか（ト言テコシヲカミメ礼イウ）ハミア何しや　是て御さるか　ヤレ〳〵嬉しや　ハミ忝ふ存升　ハミア何角といふ内に御前そふな　わに口の音かする　イヤ是ちや〳〵先某も参らふ（舞台真中ヘ行テサカシ）シやかん〳〵只今参る別の事ても御さらぬ　私拾ケ年已前より目を病ましてケ様ニ盲目と成て御さる　何卒御地蔵様の御影て開目させて被下　南無地蔵大ほさつ〳〵　先暫く是ニ通夜を致そう（左右の方ヘ物ヲイウ）イヤ是ハ御ゆるされませ〳〵　私ハ盲目て御さり升　其方ニも御通夜て御座るか　ハミやれ〳〵夫ハ御奇特て御さる　とれから参らせられたて御さる　河内の国から　ヤレ〳〵是ハ遠い所をよふ参らせられて御さる　して何の御願て御さる　ヱミ何に親子の御病気　扨〳〵夫ハ御奇特て御さる　そなたの御孝〳〵て追付御せんかいて御さらふ（又右ヲムキイウ）ハミア夫に御さるも御通夜そふニ御さるか御願て御さるか　御手の痛ニ依て参らせらたか（ママ）　是も御難儀て御さる　扨とこ元から御出て御さるそ　津の国からと仰らるゝか　扨〳〵遠い所を御奇特に存まする　私も拾ケ年已前より目をわすらいまして此様な盲人と成ました　夫故通夜をいたし御地蔵を御頼み申事て御さる　追付御地蔵様の御影て殿方

も本服いたすて御さらふ　ケ様に御咄中内にいこふ夜も更ましたそふニ御さる　御やすみなされぬか　某もまとろみませう（如常ネル）ハミハア引　あらありかたや南無地蔵ほさつ〳〵　扨〳〵ありかたい事かな　帰る道に羽ほうきか有らふ　其羽箒を持て文のとなへ三度目をなてたらハ開目させて被下りやうとの御れい夢をこふむつた　先急て帰ふ　扨〳〵あらたな事かな　人の中か誠て御座る（ト言内ニ女タテ）　是の人ハ川上の御地蔵へ参ルトいふて出させられた　殊の外遅ふ御さる程に迎に参らふと思ひ升　イヤ今下向被成るゝか　ヱイ女共何として来た　余りおそさに迎に来ました　やれ〳〵よふこそ来てくれさしました　扨ありかたい事てハないか　夫ハいか様な事て御さる　帰る道に羽箒きか有ふ程に夫を持て目を三度なづるならハ其儘開目させて被下るゝとの御れい夢ちや　扨も〳〵夫ハ嬉敷い事て御さる　羽箒きか有ふ程ニ随分（スイ）気を付ておくりやれ　心得ました　何やら杖にさわる　何ちや　羽箒きて御さる　扨〳〵ありかたい事ちや（女ヒロイ上ス）　夫ならハ先目をなてませう　とれ〳〵先いたゝかふ　おこさしませ　心得ました（羽ホヲキハタス）　南無地蔵大ほさつ〳〵　サア〳〵なてゝくれさしませ　心得ました（羽トル）　扨文か有る　夫ハ何とて御さる　せんさいなれやあきらかにといふて三度なつる事ておりやる　心得ました　せんさいなれやあきらかに何とて御さる　薄紙を一重へ置たよふニはや見ゆるよふな　夫は嬉敷う御さる　最壹度なてませう　なてゝおくりやれ（三度目ヲナスル）　ハミアあいたハ〳〵　扨〳〵ありかたい事ちや（ト言テタツ）　先久敷うて日の光を拝ふた（手ヲ合セヲかム）　扨其方もいかう年か寄た事ちやのふ　此方の目か苦に成て此様ニ年か寄りました　サア〳〵下向しませう（シテ心持アリ口伝）　かア、またなにやら御地蔵の仰られた事か有た　ヲミ夫ミ誠ニそふちや　ちと是ハそなたニハいミにくい事ちや　扨〳〵童にかくさせらるゝ事か御さらうそ　早ふ仰られい　イヤ〳〵是を言ふたらハ腹をおたちやらふニ依て是ハいうまい　言かゝつて言われいてハ気に懸てわるう御さる　さあ〳〵いわせられい　イヤ別の事てもないかそなたと某とハ悪ゑんちやほとに急て暇をやれ　今まてのことくそふならハ又目かつぶれよふと被仰た　のふ腹立や〳〵　アノやけ地蔵のこけ地蔵か頼む目斗りハ直しハせいて童をされといふ事か有る物かいやい〳〵　アミ是〳〵　もつ

たいない　其様な事をいふ物ておりやるか　其方のおしやるも身共を思ふての事なれハ腹ハ立ねとも御夢相の事ちやニ仍て是悲に及はぬ近頃名残りおしうハ思へとも暇をやる程にさう心得さしませ　〈いかにも合点致しました　童か年か寄たニ依て其様な事を仰らるゝ　〈いかな〳〵そふてハない　御地蔵の仰か背かれぬニ依ての事ちや　〈誠ニ此幾世こなたの目を気の毒に思ふて色〳〵と看病をしました　今亦此方の目か明て童に暇をくりやうとハなさけない事を被仰るゝナク　〈成程おしやれハ尤ちや　何れ亦一旦明た目かつふるゝといふ事ハ有まい　〈何んのつふれませうそ　〈夫ならハ先急て帰らふ　〈よふ御さらふ　〈此の杖ハ入らぬ物ちや　捨て行う　〈よふ御さらふ　〈さあ〳〵来さしませ　〈心得ました　〈宿へ帰たらハ定めて辺の衆か気もをつふさせらるゝて有ふ　〈シカ〳〵（廻ル内ニ目カイタム心モチ口伝ナリ）　〈とふやら目かいとう成た　何そ入ハせぬか見ておくりやれ　〈とれ〳〵見せさせられい　〈早ふ見てくれさしませ　〈童かましなウて見ませう　鳥の目ハわるうなれ此方の目ハよふなれ　〈アミいた〳〵殊の外いたむ事ちや　〈気遣ひさせらるゝな　最前の羽箒きか御さる　〈早ふなてゝおくりやれ　〈心得ました　せんさいなれやあきらかに　〈ア、いこう見にくうなつた　〈のふ〳〵次第ニ見へぬハ最壹度なてませう　〈シカ〳〵　〈せんさいなれや明きらかに　〈南無三宝ひつしりとつふれた（両人ナク）謡　〈あらかなしや今迄ハ黒まなこの見へつるニ亦まつ白に成りたる事の浅ましさよ　〈よし〳〵夫も前世の事と思ひさのみなけかせ給ひそとよ　〈是かや殊のたとへニも〳〵しゆくちうに目のつふるとハ今身の上ニ知られたり〳〵　此様な事ならハ最前の杖ハ捨まい物を　〈気遣ひさせらるゝな　童かお手を引て行ませう　〈たのむそ〳〵

シテ　無地熨斗　角頭巾　腰帯
アト　女　如常
道具　羽箒　杖竹

〳〵是ハ淀辺に住居する者て御座る　某伏見にお目をのかれぬ被下るゝ御方か御さる　此度官頭なりを被致るゝに付て急に尺の鯉を約束致されたれ共磯と失念いたいた　はや明日の事なれハ致様も御さらぬ　今日ハあれへ参り口調法を以て中訳を致て参らふと存る　誠ニ人の物を約束致て磯と忘るゝに依て度〻迷惑致す事ちや　イヤ是ちや　物申案内申（シテ楽屋より出ル）〳〵表に案内かある　案内ハ誰そ　〳〵私て御さり升　〳〵エイ誰　其方ならハ案内なしニ通りハ召されいて近頃用かましうおりやる　〳〵今日ハ面目ない事か御座つて案内を乞ひました　〳〵夫ハめすらしいおりやる　先斯ふお通りやれ　〳〵心得ました　〳〵ハア身共に逢ふて面目ないとハ何事ておりやる　〳〵されハ其事て御さる　内〻御約束の鯉をまん〳〵と求ましてとてもの事ニ生鯉にシて進しませうと存て淀橋の三番目の橋の杭に藤縄を以てつなき生鯉に致て置まして只今持て参ふと存て彼の藤縄をそろり〳〵と引上ケ升内に手の打かかるう御さつたニ依てか様な物ハ水はなれか大事ちやと存ましてつうと引上ましたれハ大事の事か御さる　〳〵夫ハ何事ちや　〳〵かた身さこふて獺かたへました　〳〵是ハ如何な事　〳〵目出度折からケ様な物ハ持て参られまいと存シ夫を打すて御断に参りました　〳〵扨〳〵其方ハりちきな人ちや　尤鯉ハ約束ハしたれ共此度ひ頭を勤るニ付て某を人と思召て方〳〵より肴を得た　鯉かないとあて事をかく事ハない　気遣ひさし升な　〳〵夫ハ何より嬉敷う存升　〳〵扨壹ツ申そふ　こふお通りやれ　〳〵先もつて忝ふ存升か御断に参りました　もふこう参り升　〳〵そふいわすとも先おとおりやれ　〳〵是非とも帰りませう　〳〵ヤア是〳〵　〳〵ハア　〳〵ヤアラ其方ハ聞へぬ人ちや　某の此度の事なれハ前広から来て手長をもおしやつたりとも誰笑う者もあるまいニ是まて来て表からいぬるという事かある物か　平ニこふ通らしませ（シカ〳〵イウテアト少シ正面江出テ下ニヲル）　〳〵つうとおとおりやれ（シカ〳〵アリテアト下ニ居ルシテワキ柱ノ先エ出テ）　〳〵あれへ参つたハ某ののかれぬ者て御さる　きやつか申事ハ百に一ツも誠かないと何れも被仰るゝ　定めて鯉もとゝのへぬてあらふすれ共たはかると見へた　某も口調法ヲ以てほつてともてる　イテ返たふとある（橋懸ヘムキテ）　〳〵ヤイ〳〵只今三こん

得た鱸の内中ニも見事な新らしかろうする鱸を一こん板にすへて出せ　エイおいやるか　〳〵是におり升　〳〵只今去方より鱸を三献洗へと言付た　何成共料理を好ましませ　〳〵夫ハありかたう存升る　明日のお客に御遣被成て被下　〳〵イヤ〳〵用意ハ沢山ニある　平ニ好ましませ　〳〵そふあらハ何にして給へませうそ　〳〵何にかよかろうそ　〳〵打身ニして給へませうか　〳〵イヤ鱸ておりやるそや　〳〵されハ鱸と仰るゝニ仍而打身と申事て御さる　〳〵其方ハ打身といふ事をしつておしやるか知らいておしやるか　〳〵何をも存ませね共承わつたニ依て申升た　〳〵おしやらねハ尤ちや　惣して鱸に打身といふ事ハない事ておりやる　〳〵ハア　〳〵此様な事もついてニ聞て置たかよい　鱸洗ふ内に打身のない子細語て聞(キカ)かせう　よふおきやれ　〳〵心得ました　正面へ開キ語リ　〳〵抑打身と言ふ事ハ寛和元年きのとの酉の年花山院其頃御世を御持ありしか四季折〳〵の御遊ヒ殊にハ御狩りを本シとし給ひ政頼に鷹を遣わせ国〻を御めくりありしに或時近江の国橋本の長か所宿に御着ある　長ハ則出合申三献のかわらけをすへ奉りしに何となく鯉を一献板にすへて出す　其時の疱丁人ハ四官の太夫忠政ニてありし　忠政それ〳〵とありしかハ忠政さんろう近き釣殿に出て畏る(カシコマル)　忠政何とか思ひけん居へたる鯉をハきらすしてすかきの板を一間はすし下成る魚をはさんてあけみさこのひれをひらりとおろし魚をはなせハ魚悦ひ石葛の影に隠れ遊ひぬ　扨板なる鯉を取て引寄せせつハと切てハしつとゝ打付ケ〳〵なみ居給へる上北面に下北面納言宰相黒袴にいたらせ給ふ迄皆三刀ナツ、打付参らせしかハ忠政疱丁いつ〳〵よりも神妙なり　軍功ハ功によるへしとありしよりこのかた打身といふ事始りたり　惣して打身といふハ海の物にてハ鯛(タイ)川の物(モノ)にてハ鯉ならてハあるへからす　御身の親ハ疱丁師疱丁仁の子孫として家をも継ふする　其方の(カ)鱸に打身たへよふ抔といふて立居の人に笑ハれそ給ふな　構へてない事ニて候そ　〳〵無ひ事を申て近頃面目も御座らぬ　〳〵某ハ大事ないか他所へ(ニ)ておしやるなといふ事ちや　〳〵シカ〳〵　〳〵此上ハ料理も某に任せて置しませ　〳〵シカ〳〵　〳〵内よりも鱸出来候とて切目尋常なるまな板に青木の真那箸備前疱丁紙一重お取そへしつけにし付たる若イ者か両人して持て出て其方の前におこふす　其時其方のおしやりよふにハ是の御事ハ隠れもなき疱丁仁に渡らせ給ふ程に一手切て見せさせられかしとおしやれ　〳〵シカ〳〵　〳〵さらハ切て見せ申さ

んとひさおし直し板取つて引寄せ箸刀を取り紙をハ三ツに切ル　真那板頭に直し礼式の水こそけさつ〳〵さつと三度する儘ニ刀の裏表をしつとり〳〵とぬぐい立所に箸押たて一の刀に魚頭をつき同真那板頭ニ直し扨上身をおろしおろしもあへすしつとゝ返シ下身をおろし中落とう〳〵としていさ是をいり物にして給へよふか　〈シカ〳〵　〈魚頭を三枚六枚といふ物に崩し割にして是をあなた江遣して拵らやうする逗留にそなたと某と素物語も済まい　幸ひ残した上身下身を以ていさ鱠に作て給ふ　〈シカ〳〵　〈惣して鱠には作りよふかおりやる　大きなをちいさいかれちいさいを大きかれと引筋かへて刀はやにすつはり〳〵と作つていかにもきつ〳〵としたか酢ニ而あへ深草かわらけにちよほ〳〵とよそふて其方江も申そふす　身共もたへよふ時内よりも日本一の御酒をかんのまん〳〵と仕済て持て出よふ右をもつて五はいお呑やろうか　〈何か扨結構な御肴て御さる物のたへませいてハ　〈近頃嬉敷うおりやる　其時内よりもいり物出来て候迎ゆの葉の香に貝杓子おつ取添へて持て出よふ　是をよい処をほつてよそふて其方へも申そふ時ちとおほめおくやるまいか　〈何とほめませう　〈惣して人ハ上ケらるゝとハ思へとも誉らるゝハ嬉敷物ちや　是の御事ハ疱丁の事ハ申に及ハす塩味迄(アンハイ)か上手にて渡らせ給ふ抔と誉てくれさしませ　〈いかにも誉ませう　〈おほめやらふか　〈シカ〳〵　〈扨今度ハ色の替た御酒をたふ〳〵とついて出よふたりを以て七盃おのみやらろうか　〈最前呑ましたか夥敷う御さる　得給へ升まい　〈イヤ〳〵最前鱠の口にたに五盃お呑やつた　是ハしみ〳〵とした肴ちや　平ニ呑しませ　〈こなたも上り升ならハたへませう　〈何か扨お為ちや物たへいて何とせう　〈夫ならハたへませう呑ふ　〈ハア　〈近頃嬉敷うこそあれ　是から小盃て二三盃おのみやらぬか但シ当世様に取ふか　〈最早おとりなされませ　〈最ふよふ御さりませう　〈扨御酒の上ニハこい茶かよい物てハないか　〈シカ〳〵　〈其方ハ何から何迄仕合な人ちや　お知りやる通り宇治辺に知いんあまた持た　此度頭を勤るに付て極を三袋ひき得た　是を一服立て申そふ　〈よふこさりませう　〈是も其方におたてやれといおふすれ共茶ハ亭主の役なれハにしり寄て湯七分あわ八分むく〳〵やわ〳〵ほう〳〵と猫の背を立たよふに中高にたてなして其方へ申そふ時其方ハ一口のふてハ鼻へハふつとハふき出シ二口のふてハふつとハふき出シ結講なお茶

を被下て忝ないと礼ハおしやらふか　〳〵シカ〳〵　〳〵親子の心安サハ如何程もお呑みやれといゝたけれとも聞ハ其方もわひ好の椽の端にも腰をかくると聞た　よもこい茶を二福とハお呑みやるまいそ　〳〵シカ〳〵　〳〵夫ならハ是も仕廻ふ　〳〵よふ御さりませう　〳〵扨迚事に暇乞の仕様を教へてやらふか　先御料理を被下ましての事に致ませう　〳〵シカ〳〵　〳〵扨其方の最前おのみやつた酒ハ五盃と七盃てハないか　〳〵シカ〳〵　〳〵いかに其方の大盃て十二はいお呑みやつたらハ口元もむそう成りいふへき時きは得いわいてとかもない扇を縄にのふて結句御地走に成まして忝ない　此後ハ鯉にても候へ鱸ニ而も候へ持て参て忝ない急度御礼を申ませうさらハ〳〵〳〵と此様にこける程もつてなしてかへしたけれと其方の鯉を川うそか喰たとおしやることく今咄の鱸も放生といふ虫か喰ふて何もない　喰た心をして足元のあかい内にとつとゝお帰へりやれ（アトヲツ出ス）　〳〵面目も御さらぬ　〳〵よふおりやつた　〳〵ハア

（シテ）亭主　熨斗目　長上下　少刀　但シ紅入らぬ段熨斗目かヨシ
アト　半上下

とちはくれ

（アト）〳〵是ハ此当りの者て御さる　今日ハ志ス日に当て御座る　寺の和尚様をお頼申勤を致てもらひ御斎を進上と存る道行　誠ニ俄に参る事ちやニ依て定而御隙の入らせらるゝ事も存ぬ　某か直に参る事ちやに依て定而御出被成て被下るゝて御さらふ　イヤ何角といふ内に是ちや　物申案内申（シテ楽屋出ル）（シテ）〳〵表ニ案内かある　案内ハ誰そ（一ア）〳〵私て御さる（シテ）〳〵エイ誰殿　早ミより御出て御さるか　何そ思召て御出て御さるか（一ア）〳〵只今参るハ別の事ても御座らぬ

今日ハちと志ス日ニ当て御座る　俄の事なれ共お斎をあけとふ存て参つて御座るシテ　扨〳〵それハ過分に御座る
夫こそ出家の望処て御さる　いかにも参らふ一ア　夫ハ忝ふ御さる　乍去私の事て御されハお布施は得用意致ませぬ
何卒御出被成て被下りやうならハ忝ふ存ませう　扨〳〵りちきな事をいわせらるゝ　一ツ飯の被下るゝか何より
志ちや　左様な事ハ思ひよらぬ事て御さる一ア　夫ハ近頃忝ふ存升一ア　左様なら私ハ御先へ参り升　追付御出被
成て被下　只今夫へ参りもはやこさるか一ア　ハア　よふ御さつた一ア　ハア笛サニサ付シテ楽やエ入アト出ル二ア　是ハ
此辺りの者て御さる　今日ハ親の年忌ニ当て御さる　御寺の御坊様を御頼申勤を致て貰ふと存る　誠ニ御布施ハ用意
致たれ共御斎ハ得拵へぬ　何卒御出被成るれハよふ御さるか　イヤ何角いふ内に是ちや　先案内を乞ふ　物申案内申
楽ヤへムキ案内コウシテ楽ヤより出ル　又表に案内か有　案内ハ誰そ二ア　私て御さる　エイ誰殿　此方ならハ案内なしニ通り
ハさせらいて何と思召ての御出て御さる二ノアト　只今参るハ別の事ても御座らぬ　今日ハ親の年忌て御座る　何卒御
出被成て御勤被成りやうならハ忝ふ存ませう　扨〳〵夫ハ結構な御志て御さる　如何ニも参り勤を致ませう
二ア　夫ハ近頃忝ふ存升　夫ニ付私の事て御されハ御布施は用意致て御座れ共御斎ハ得拵へませぬ　何卒御出被成て
下さりやうならハ忝ふ存升　イヤ〳〵御布施にも及ふ事てハ御さらぬ　追付夫へ参りませう二ア　夫ハ近頃忝ふ
御さる　左様ならハ私は御先へ参り升る　座敷へ御さつて御茶ても参らぬか二ア　忝ふ御座る　最斯ふ参り升
最早帰らせらるゝか二ア　ハア　よふ御さつた二ア　ハアアト太コサへ行クツロクシテ少シ前へ出テウシャウヱシキシウ　一段の事を申て参られ
た　扨いつれへ参つた物てあらふそ　先御布施の方へ参ふ　イヤ〳〵有性恵式住とある時ハしきニ依てちうす　ケ様
にある時は斎か肝要ウちや　結講な御斎をたふるならハ布施の事も思われまい　先御斎へ参ふか又爰にあるたんとハ
是まんきやうのしやうもん是に寄てしんそを残さすと言ふ時は只布施か肝要ちや　如何ニも結講な御斎を喰ふといへ
とも布施を取らねはならぬ　兎角布施の方へ参ふか又一ツ時の栄花に千歳の命をのふるといふ時ハ御斎か肝要ちや
思ひ切て斎江参ふ　イヤ〳〵又爰に大事のしやんか有　羅たいふはとふすむゑんさいと聞時はたかにてハやすからす
其上麻の衣紙ふすまをもふけかたふして永く生死の望み少しと聞時ハ只布施か肝要ちや　又十疋の布施物を真中よ

り押切て五十腰ハしゆなにあたへゑんそ薪を求てさせんす　残る五十疋(ママ)にて紙をとゝのへふすまを作るたるまかつきに打かふつて座せん工夫をするならハなとかとふにんに至るましきそ　そふちや只布施へ行ふ　扨〳〵最前からとやこふと思ふていらぬ事を案して遅なわつた　イヤ是ちや　案内の乞ふ（如常ニノアトシテ二ノ柱ノ先エ立）　案内ハ誰そ　愚僧て御さる　エイ御坊様　是ハ只今ハ何の為に御出て御さる　イヤお約束ちやニ依て参つた　イヤ爰な人か　夫ハ今朝の事て御さる　今時分御されと御約束ハ致さぬ　是ハ遅ふ御さるか　またおしやる　今時分あかつて来て定而門違へてあらふ　早うお帰へりやれ　そふあらハよしちと遅く共約束の事ちや程に用意のお布施をおこさしませ　イヤ爰な坊主かい、出した事ハ出家といふ者ハいかにも早ミより経を読又あるいハありかたい教化をいふ物ちや　時分過て来て何ちや布施を取ふ　ヲ、扨約束ちや物とらいてハ　イヤ爰な者か　そちのよふな坊主にやる事ハならぬ　はやく御帰へりやれ　其方かくれぬといふてかもふ事か　夫ならハいに升　夫ハ勝手ニおしやれ　ア、扨〳〵腹の立事ちや　そつともくるしうない　その為にこそ誰殿へも約束をしたギヤクニ廻ル　是から誰殿へ行て斎ヲをたひよふ　ア、腹の立事かな　ちと遅いといふて苦敷うない事ちやドより案内乞一ノ松アトワキサへ出ル　案内ハ誰そ　愚僧て御さる　エイ御坊様今朝ハとれへそ御出被成ましたか　イヤとれへも参らぬか御約束ちやニ依て参つた　イヤ爰な人かおしやる事ハ　最早ひるも過る時分ちや　其方のよふな御坊ニ振舞事ハならぬ　早ミお帰られ　扨〳〵此方もちと遅いといふて坊主も来ぬに斎を仕廻ふと言ふ事かある物ておりやるか　是の斎をたへぬといふて愚僧か物を喰すニ居らりよふか　身共ハ宿へ成共居てたへ升るわいの　お主か喰ふか喰まいか身共かかもふ事か　いらぬ事を言わす共早ふお帰へりやれツキヤル　其様ニおしやらいてもいに升るわいの　とつ〳〵とお帰られツキヤリサニツク　アミ扨〳〵とれも〳〵腹をたつるハ　是ハはや斎にも布施ニもはすれた　扨ミ腹の立事ちやコト　是ハ先何とした物て有ふシヤンコミロモチナリ　ありや旦那のとふりちや　愚僧かひか事ちや候　それ人ハ六道ニ迷ふと申か愚僧ハ四道に迷ふて候　夫を如何ニといふに斎へ行ふか布施へ行ふかと思ふ処か畜生道又斎をこたへ(ママ)早ふ来いかしとふ来いかしと今や遅しと待処へ行かぬか哦鬼道斎布施共に思ひわかぬ所か仕道旦那にも腹を

立てさせ愚僧も腹をたて互にたてつたてられつしたる所か修羅道にんにくにたいの衣を着シ罪障懺悔ノ袈裟をかけしやうりきの珠数を手にまとい仏語をとのをるといへとも成仏得脱得せすして無間のそこにたんふと落る事の浅間敷ハ候　思へハ〳〵早〻より参り香花をとり勤を致そうする物を浅間敷や一念の迷ひ故施主両人の志を無に致たる事の浅間敷さわ候　ハア南無三宝しないたり〳〵

シテ　坊主　初白無く　頭巾　珠数　後衣けさかけ出ル中入アリ
アト　施主二人　長上下

歌仙

次第願主　けふ吉日と思ひたつ〳〵紀の路の旅にいしやうよ　次願主　是ハ都方に住居する者て御座る　某和歌の道ニ心をよせ此度願ノ起し玉津しま二参詣仕候　道行　住なれし都の空を跡に見て〳〵足にまかせてあゆみつゝ道よりやかて舟に乗り行ハ程なく玉津嶋神の御前に着にけり　願主　急程に玉津嶋に着た　殊勝な宮立といゝ面白いけしきちや　扨三十六人の歌仙の御姿を絵馬に書て貰ふた　御神前の左右に懸けふ　誠に見事に出来た絵馬ちや　殊ニ人丸の御顔は物を仰らるゝやうな　此遍照の御姿ハ働かせらるゝやうな　先拝ふ　心中願を叶へ給へ玉津嶋明神〳〵　急て下向致そふと存る　楽屋へ入ル　人丸　豊成る〳〵今此の御代の歌合せ月雪花を取り〳〵に目に見る事も聞事も皆和歌の種なれや詠して君を仰かん〳〵　磯の浪〳〵松吹風の音までも処から迚和歌のうら名も面白や立出ていさ〳〵月に遊ん　今宵の月に遊ん　右僧正　小町　左人丸　業平　人丸　元輔　猿丸　夫天地ひらけはしまりしより此の方和歌を以て国をおさめ目ニ見へぬ鬼神をも哀とおもわするハ皆和歌の徳て御さる　猿丸　仰らるゝ通りて御さる　日本ハ神国ニて外国のあなとりをうけす目出

度豊かな国て御さるニ依て返〻も和歌の徳を思ふ事て御さる　元輔　其通りて御さる　一首詠すれハ万の悪念を遠さかり殊ニハ夫婦妹背の始ともなるハ和歌の徳て目出度物て御座る　僧正　愚僧も左様ニ存してすい分心に懸る事て御座る　人丸　扨今宵ハ名月なれハ末〻の賤し敷者迄も月詠メて慰て御さろう　遍　如何にも賤しき者か生肴抔を喰イ酒を呑楽しむハうらやましう御さる　元輔　又僧正の御麁相か出ましたよ　各　笑　業平　夫ニ付僧正ハ此中馬から落させられたと承りつたか御腰は痛ハ致ませぬか　僧正　されハ嵯峨野て馬から落ましたかされともけかハ致しませなんた　よふそれを知らせられたのふ　人丸　僧正の女郎花の哥かよふ出来たと有て何れも承て御さる　猿丸　兎角遍照にハ女郎花の歌か御好て御さる　各　笑　小町　惣して此日本にむまれ歌を詠ぬハ心ない事て御さる　人丸　其断をしつて当社の参詣ハ夥敷事て御さる　小町　夫ニ付まして此中わらハか貝へ参詣の者か紙を噛ふて打付ましたか何とした事て御座ろう　猿丸　されハ何の為て御さらうそ　元輔　合点の行ぬ事て御さる　業平　夫ハ力紙といふて力の願ひのある者か打付る事て御さる　猿丸　よふ御存て御さる　僧正　イヤ〳〵夫ハそふてハ御さるまい　小町の姿かうるわしさに何そ外の願ひてうち付まして御さらう　人丸　ハアすれハ某の顔へも打付ましたか身共かうるわしさて御座ろう　元輔　夫ハ的か違ひました　六人　笑　人丸　扨今宵ハ酒ゑんのはしめ酒を得呑ぬ者ニハ哥を詠しやうと思ふてだいを拵へて置ましたか何れも何とて御さるらふそ　一段とよふ御座らふ　人丸　のふ〳〵元輔太儀なから取て来さしませ　元輔　心得ました　後見サヘ取ニ入カツラヲケノフタニノセ持出ル　元輔　さあ〳〵惣匠とらせられい　猿丸　是ハ一段とよふ御座らう　業平　言わせらるゝ通りおもしらう御座らう　人丸　御先へ取り升る　各　シカ〳〵雪によする山シカ〳〵　元輔　扨惣匠ハ何をとらせられた　人丸　其ハ珍しいたいをとりました　シカ〳〵　人丸　雪ニよする山姥　僧正　古寺の蛸　業平　猪首の白鷺　小町　紅揃ニよする紫　人丸　ヲ〻小町相応の題て御座る　各　シカ〳〵　其通りて御さる　猿丸　蜘蛛の巣ニ懸る釣鐘　元輔　空を飛ふとう亀　六人　笑　僧正　珍敷題て御さる　六人　其通りて御さる　業平　扨〻みな面白い題て御さる　六人　其通りて御さる　人丸　先酒ゑんの始メ升まいか　僧正　一段とよふ御さらう　人丸　そふあらハ酌ハ女性かよふ御さろふ　小町酌をおしやれ　小町　心得ました　人丸　誠ニ毎もとハ違ひ今宵の月ハ格別て御さる　僧正　言わせらるゝ通りあの雲のけしきまてか面

白ふ御さる 小町 サア何れもから成共始メさせられい 人丸 迚もの事ニ小町から呑ふて思ひさしにさたしませ 小町
是ハはすかしい事て御さるか左右あらハ童か初メませう 僧正 愚僧ハ此中替た物を拵へました 業平 夫ハなんて御さ
る 僧正 十二壹重を拵へましたか誰そにやりたい物て御さる 人丸 此盃ハとれへ参ろうそ シカ〳〵 小町 是ハ僧正へ
しんしませう 僧正 あの愚僧ニか 小町 左様て御さる 僧正 やれ〳〵夫ハ忝ひ 元輔 僧正へ盃か参た 人丸 あゝ是ハ
面白ふ御座らふ シカ〳〵 僧正 是を小町へ盃を戻そう 色ミシカ〳〵 人丸 ちよふ度お呑みやれ 小町 童ハ酒
ハたへませぬ 人丸 夫ならハ歌をおよみやれ 小町 歌ハよみませうか酒ハ得呑ませぬ 僧正 のふ〳〵小町は酒ハなり
ませぬ 各 シカ〳〵哥をよめといふ 僧正 のふ〳〵いかに小町ちやといふて其様ニいわせられて何とよまるゝ物て
御さらう 小町 こふも御さらうか 六人 はや出ましたか 小町 色見へてうつろふ物ハ世中の人のこゝろの花にそあり
ける 僧正 扨〳〵面白ひ事かな 小町お出かしやつたのふ 僧正斗リホムルミナ〳〵ヲモシロヲナイトイウヲモイレ 人丸 此色みへてかわるう御さる
僧正 イヤ〳〵色見へてとすんてこそ面白けれ夫ににごるといふ事かある物て御座らうか ヲミ小町おてかしやつた
面白い事ておりやる 人丸 何れもにごつてこそ面白けれすんてハ面白う御座らぬのふ 六人 是ハ面白ふ御座らぬ
僧正 イヤ〳〵色見へてハ面白う御さる 小町お出かしやつた〳〵 人丸 最前から僧正のひとりさへきつて小町にひ
ミきをせらるゝ 合点の行ぬ事て御さる 六人 其通りて御さる 僧正 イヤ〳〵ひいきハ致さぬ 身共ハ出家から盃の仕様か
合点か行かぬ 元輔 いつれ最前から盃の仕様か合点か行かぬ 僧正 何れもハ小町と某の中に様子の有よふな事をおし
やる 業平 のふ〳〵何れも清水寺て小町に僧正の返とうの歌かおかしい事て御さる 元輔 返哥 其通りも聞事て御さる
六人 其通りて御さる 六人 笑 僧正 其様に各おしやるか最早今日から何れもと参会ハ致さぬそ お主か参会せぬと
いふて何れもなんと思ふそや 元輔 兎角僧正に物をいわせて置ニ依而ちや 皆〳〵てうちやくさせられい 各 心得
たミナ〳〵タミク小町 六人 キノドクカル 覚へたか〳〵〳〵〳〵 僧正 ヤイ〳〵出家をこのよふニして今に目に物を見せうそ 小町ツレ入ル 中人
人丸 あれ〳〵僧正かなりを見させられい 各 笑 元輔 ヤア〳〵何といふそ 僧正か腹を立て小町を連て是江おし
よするといふか のふ〳〵何れも僧正かてうちやくせられたをむねんに思ひこ町ヲかたらうて是へ押よすると申

人丸〳〵出家と女一人押よすると申て何程の事か御座らう　元輔〳〵イヤ〳〵此様な事ハ用意をしたかよふ御さる　身拵へをさしませシカ〳〵笛サニ下ニ居ル杖ツキタツ　僧正小町一セイ〳〵夜嵐の音すさましきあら礒に寄せて打とれ浦のなみ　僧正ヤリ小町長刀モテ橋懸リニテ人丸ハ常ノ杖外ハ長キ竹ナリ

元輔カケリ　人丸〳〵三十余人の哥人ハ各〳〵歌を争て祝儀判するこそおかしけれ　○此前ニ入ヱイ〳〵ウヲミ　○此印ヘ行

人丸〳〵其中に人丸〳〵すゝみ出てほの〳〵見れハ赤地の打きゑならぬ匂ひかおりきぬれハ赤地ノの坂をもこゆるとよみし笹竹の杖をおつとり直し懸りけれハ　僧正〳〵花山の僧正馬よりおり立人丸ニ後渡り合むんすと組めハ　六人〳〵我も〳〵とくんす転んす哥よみハみな腰おれて休らいしか　人丸〳〵夜明ケ鳥の声〳〵に　各〳〵夜明ケ鳥のこへにおとろき本の絵馬と成りニけり

元輔カケリソレヨリヒトリツヽ僧正小町各タミキヤイ四人ハ橋カミリヘ行
人丸小町ノシリタミクコトアリ橋カミリヱ入カハル

シテ〳〵人丸　金風折　白タレ　白髭　カリキヌ
厚板　サシヌキ　扇

シテニテモ〳〵僧正　角ホウシ　ケサ　珠数　中ケイ
小格子厚板　紫衣　サシヌキ

アト〳〵業平　ウイカンムリ　ヱヲハサシテ　弓矢ナクイ
ヲイカケ　下袴　太刀　ヒトヱカリキヌ

〳〵小町　ハク　カツラ　紅ノ大口　面乙　日扇
唐折　ツホヲリ

〳〵猿丸　ナシウチ右へ折　モヱキ大口　ヒトヘカリキヌ
厚板　少刀

〳〵元輔　ヨリカリキヌ　大臣ヱホシ後ヱ折
厚板　白大口　少刀　扇

〳〵絵馬打　のしめ　懸素袍　クミリ袴

主 是ハ此辺りの者て御さる　祇園会も近くニ成て御さる　当年ハ某も頭ニ当た　各江人を遣し山の談合を致そふと存る　太郎官者有るか　如常　主 汝呼出別の事てない　祇園会も近ミニ成たてハないか　太 御意被成るゝ通り近〳〵ニ成りました　主 夫ニ付て当年ハ某祇園会の当ニあたつた　太 夫はお目出とふ存升　主 汝は太儀なからいつれもへ行て祇園会も近ミに成まして御さる　山の御相談か申とう御座る程ニお出被成て下さるゝよふニと申て来い　太 畏て御さる　主 扨汝ハ物ニ差出てわるい　何れも御座つたり共必差し出ぬよふニせい　太 心得ました　主 急て行てやかて戻れ　太 ハア　主 ヱイ　太 ハア　太 扨も〳〵嬉敷い事かな何卒当にあたらせらるゝやうニと思たニ此よふな悦はしい事ハない　先ツ殿方へ参ふそ　イヤ誰殿へ参ふ　誠ニ何れも御出被成て山の御相談被成たらハ定てよい山か来(ママ)るて有う　イヤ何角言ふ内に是ちや　物申案内申　立頭 イヤ表ニ案内か有　案内ハ誰そ　太 ハア私て御さり升　頭 エイ太郎官者何と思ふて来た　太 ハア頼ふた物申され升ハ御神事も近ミニ成りまして御さるニ依て山の御相談か致とふ御さる　お出被成て下さるゝよふニと申ておこされましたし　頭 やれ〳〵夫はよふこそ申ておこされたれ　幸ひ何れも是に寄て御さる　追付何れも同道して参ふといへ　太 夫ハ一段て御さる　左様ならハ私ハお先へ参りませう　頭 ヲミ行ケ〳〵　太 ハア引　何と有ふと存たニお出被成りやうとのお事ちや　急て申上ふ　申上升　主 戻たか　太 唯今帰りました　主 何とちや　太 誰殿へ参つて御座れハ何れもあれニお戻り被成追付御同道被成てお出て御さる　主 夫ハ一段ちや　見へたらハ此方へ言へ　太 畏て御さる　頭 のふ〳〵何れも御さるか　各 是におり升〳〵　頭 唯今誰殿より御神事も近ミニ成ましたニ依て山の相談か致度と申て参りました　イサ参り升まいか　各 一段とよふ御さらふ　立衆 いかにも参りませう　頭 左右あらハさあ〳〵御され〳〵　各 心得ました〳〵　太郎官者来たそ　一人ツ、シカ〳〵　太 是ハ殿方もよふ御出被成ました　先こふお通り被成ませ　各 心得た〳〵　太 殿方もお出て御さる　お当頭目出度と一人ツ、言て下ニ居ル　主 忝ふ御さる　頭 お人を遣されすとも

参らふニ御念の入ました　太郎官者を遣されて忝ふ御さる　各　忝ふ御さる　主　最早間も御さらぬニ依て御相談致とう存て遣しました　立衆　忝ふ御さる　頭　御念の入た事て御さる　立衆シカ〳〵アリ太ら先へ出テ　太　扨何れも様へ申上升　先ツ当年ハ頼ふた者当にあたられまして御さる程に何れも様頼上升　宜敷う御相談被成て被下　ト言テナニコミロナク主ノカヲミ見ル主腹タテヲシユル太郎大小ノ間に下ニヲル　主　扨毎年〳〵同し山も珍敷うないニ依て当年ハ何卒珍敷山を拵うと存か何れも何と思召す　頭　一段と　立衆　よふ御さらふ　主　夫ならハ何れものお好を承りませう　頭　先御亭から言ふてみさせられい　各　夫かよふ御さらう　主　はや某の思ひ付もないてハ御座らぬ　何れもへ御咄申ませうか　各　とのよふな事て御さる　主　某の存るハ大きな山を致て扨猪のしゝに新田の四郎か打乗て山を懸け廻る処ハ何とて御さらう　立衆　是ハよふ御さらう　主　夫ならハ是ニきわめませうか　太郎先へ出テ　太　是にきわまりましたか　頭　先是かよかろうと思ふ　太　是ハ悪う御さる　先猪のしゝと言ふ物か不調法な物て御さる　夫ニ新田の四郎か乗たと申て面白かろう筈か御さらぬ　ト言内ニ主ヤイト言太郎主ノ方ヲ見る又顔ニテヲシユル太郎元ノ座へ行　頭　如何様太郎官者か申か尤て御さる　主　是ハ申て見ました事て御さる　又何れもの御好かうけたまわりとう御さる　頭　夫ならハ某の思ひ付を申て見ませう　各　よふ御さらう　頭　某の存るハ先山の上に土俵をつきまして河津と俣野か角力ハ何んとて御座らう　各　是ハよふ御さろう　太郎急キ出テ　太　中〳〵　頭　何事ちや　太　是ハよふ御さり升まい　頭　なんとちや　太　先山の上て裸ニなるといふ事かわるう御座る　夫ニ何そや目口はたけて角力　笑　分けもない事て御さる　ヤイ〳〵すつこんておろう　太郎元ノサへ行　各　是もよふ御さり升まい　頭　又各の思召か聞とう御さる　一　某の思ひ付も申ませう　各　よふ御座らう　一　先山の上に大きな瀧ヲ拵へて扨鯉の登る処ハ何とて御座らう　主　龍門の瀧是ハよふ御さらう　各　是ハよふ御さらう　太郎シテ柱ノ先ニテ　太　苦〳〵敷　是ハ出すニハ居られぬ　又出ル　太　アミ申〳〵すれハ是に極りましたか　立衆　其通りちや　太　夫ならハ申ませう　先当年ハ珍ら敷い山を出かさせられたいとのお事てハ御さらぬか　立衆　如何ニも其通りちや　太　夫に又れき〳〵寄らせられて何を御相談被成升　夫ハ例年出升る　則町の名も鯉山の丁と申てハ御さらぬか　夫ニ同山を二ツ出したらハほむる者ハなふてせけんの笑ひ草て御さらう　ト言テ主ノ方ヲ見ル主太郎ヲニラミ居ル太郎立テ座付　二　是ハ身共かあやまりました　頭　何と思召

そ　最前から太郎官者か何角と申も思ひ付かある物て御さろう　是へ呼ふて聞升まいか　立衆　是ハ能ふ御さらう

主　扨〳〵分けもない　あれらつれか申事か何と取上ケ相談か成ませう　頭　あれちやと申て何そ思ひ付かあるまい物ても御さらぬ　太郎官者〳〵呼ブ　主　分ケもない　おかせられい　頭　太郎官者〳〵（ト言内ニ太郎主ノ方ヲ見テカフリフル）　太　何の御用て御座り升

頭　苦敷うない是へ出よ　太　参つても苦敷う御座りませぬか（ミナ〳〵タイシナイトイウ主腹タチ正面ムキ居ル太郎出ル）　太　されハの事て御さる　先当年ハ始メて当にあたられて御さるニ依て何卒首尾よふ勤させとう存て夜も寝ませすニとつおいつ思案を致ておもしろい珍敷い山を思ひ付ておきましたれ共何を申も私か言ふ事ハ頼ふた者か承引致されませぬ（ト言テタツ）　私ハ御ゆるされませ　頭　苦敷うない

急て言へ　太　申ても苦敷う御さるまいか　各　ヲミ苦敷うない程に急て言へ　太　私か思ひ付も山ハ山て御さる　こさかしいけんそな山を致て如何ニもよわ〳〵とした罪人の歩む所を片はらの洞より牛頭馬頭あほうらせつ抔と申恐敷い鬼か出まして彼の罪人を山江追ツのほせつ下しつ致す処を太鼓や鉦笛鼓抔てはやしたらハ天晴是にまさつた面白い山ハ御さり升まい　頭　是ハ出来た能い山ちや　是に極められい（各ヨイト言シカ〳〵）　主　是〳〵分ケもない此日度御神事ニ鬼の罪人のといふか何と成物て御さらう　頭　そこか御神事て御さる　大事御座るまい　太　私か申様な面白珍敷い山ハいらぬ物て御座る　只不調法な猪かよふ御さらう（主腹立太郎官者ヲタミク太郎官者下ニヲル）　頭　ア、是〳〵兎角此山に極メませう

各　よふ御さらう（ママ）　主　其上鬼ニハ成る人も御さらふか罪人に成る人か御さるまい　頭　夫こそ例年の通り鬮取かよふ御さろう（主又太郎官者ヲタミク）　頭　太郎官者鬮を拵へい　太　畏て御さる（カツラ桶ノフタニ鬮ヲ入持出ル）　太　御取被成ませ（立衆各取テ主ヘ持て行ケトイウ太郎ウツムキトヲクヨリ鬮ヲサシ出ス主取り）

毎も当人から壹人ツ、人か出升る　主　鬮か壹ツあまりました　頭　汝とれ　主　あれニハ鬮はとらしませぬ　頭　人かいれハやとうて出し升る　頭　ある者をやとうて出すといふ事かある物て御さろうか苦敷うないとれ　太　畏て御さる（シテ鬮取り太鼓サヘ行フタ置鬮ヲ橋懸りヘモチ行アケテ見テイタミク）　頭　何れも鬮を開かせられい（ト言各鬮ヲ見ル主ハワキ正面ヱヒラキヒソカニ鬮見ル下ニ置太郎官者出テ各〳〵役ヲキク）　太　こなたハ何のお役て御さる（各〳〵太鼓鉦笛鼓抔色〳〵イウナリ）　太　是ハ御太儀御苦労なお役て御さり升（それ〳〵ニいふなり主ヘシテサシヲシエル）　頭　御亭主開かせられたか　主　また鬮を見は致さぬか此山ハいらぬ物て御さる　頭　是程

ニ極た物を其よふな事か御さろうか　主　夫ならハ鬮を取り直シませう　頭　祇園会初メの鬮を取直シた例ハこさらぬ　主腹立

頭　是非共開かせられい　立頭鬮ヲトツテ　頭　某か開きませう　鬮取ヲ先ヘ出ス　頭　立テ主罪人　太郎真中ヘ出テ　太　鬼ハ是ニ候　頭　間

もない程に稽古させられい　太　是へ出て責おれといふて被下　主腹立心持ナリ杖竹ノ先ヲ持テ立頭シテニ稽古セイトイウシテ杖ヲツキツカ〳〵ト出ル主ニラムシテ橋カミリヘニケルナリ

頭　是ハ何とした　太　また責もせぬ先からあのよふニにらまれ升る　にらまれぬよふニ被仰て被下　頭　是ハ尤

ちや　のふ〳〵御神事のことちや　堪忍して稽古なされ　主　合点しました　是へ出よといふて被下

太郎官者江右之通りヲイウシテツエツキ出イカニ罪人イソケ〳〵トコソセメ拍子ヲフミ目付ハシラヘ行順ニ大廻リシテウチコム主ヲタミク

た　太　ふつゝり責ませぬ　ツエヲステ楽屋の方ヲムキヘツタリト下ニ居ル　主　悪いやつの　太郎官者ノカタウツシテアイタ〳〵ハシカミリヘニケル　頭　何とし

を責るといふ事こそ御され罪人か鬼を責る事ハ聞た事もない　のふ〳〵いたやの〳〵　頭　此度の事ちや何事も堪忍して

稽古せい　主　夫ならハ身拵へをして責ませう　頼ふた者にも罪人の躰心に取り作らふて被下　頭　心得た　此度の事ち

や　何事も堪忍のして罪人のていに取り作らふて稽古させられい　主　是ハよふ御さる　頭　そふいわすともサア〳〵身

拵へをさせられい　ト言テムリニ下ニヲラセカミサハキ白ムクツホヲル亦ヌキカケニテモヨシ両方共カタトル内ニシカ〳〵アリ舞台真中より脇ノ方先ヱ出テ　主　あらかなしや只今参り候にさのみな

御責候ひそ　シテハアツイタツホヲル鬼ノ面カケ杖ツキ出ル　太　いかに罪人それ地獄遠きにあらす極楽はるかなり　いそけ〳〵とこそ

ト言テ責拍子フミ前ノコトク廻りクハツシ二ツ二ツ目ニ主ヲ見ルニラムシテウツムク跡ヘヒサリ又見ルニラムソレより目付柱へ行角トリ小廻りシテ主ヲ見ルニラム夫よりウツムキテワキ座へ行見ルニラム亦ウツムキ主ノウシロヲ通りシテ柱へ行小廻りシテタチカツシシテイソケ〳〵ト言主少シ廻ルシテ竹馬ニ乗り主ノ前ニテカヲヱソデヲアテ行スキ二ノ松ニテコチヱ〳〵ト言主ニラムシテ拍子壹ツフミ楽屋へ出て大廻り小廻りシテノ打コム主ヲタミク主ニクイヤツノト言ふテタミキ追込ムナリシテ竹杖ニテウケトムルヨウニシテ面ヲトリニケ入ル立衆待セラレイ〳〵抔いふテ入ナリ

シテ　太郎官者　半上下　後厚板ツホヲル　面

アト　主　段のしめ長上下又ハ素袍ニテモ　白小袖下ニ着モヨシ後ヌキカケル

ベ　立衆　長上下

道具　かつら桶フタ紙折鬮ニ　スル杖二本主長キヲ持ツ

ア　是ハ此辺りの者て御さる　某一在所として少さい堂をこんりう致て御さる　未似合敷お住持かない　只今より海道江参り御出家もあらハ同道致て参ふと存る　誠ニ内〻の念願て御さつたニおもふよふニ堂ハ出来る　此上御出家さへあれハ一在所の願なしうしゆ致すと言ふ物ちや　イヤ何角と言ふ内に海道ちや　先ツ是に待合て居て似合敷い御出家も通らせられたらは言葉をかけ同道致そうと存る（ト言テフヱサニ居ル）　ヒ　是ハこの当りの者て御さる　某若イ時より親のいけんの聞すれいの手磨を致て御されハさん〳〵不仕合て家さいハ言ふニ及ハす妻子迄打こふて御さる　何とも致しよふか御さらぬニ依て心よりおこらぬ出家致て御さる　又壹人召仕ふ者を同宿に致そうと存て先ツ是も坊主に致した　いつれも出家致てハ御され共一飯を分くるゝ人もないニ依て迷惑の致す　此上ハ同宿を召つれ諸国を修行に出ふと存る　同宿有るか（同宿）　ヒ　ハア　ヒ　イタカ（同）　ヒ　御前に　ヒ　そなた呼出ス別の事て無い　両人出家致てハあれ共一飯を分ケくるゝ者もないニ依て迷惑致す　此上ハ諸国修行ニ出よふと思ふか何とあろふ（同）　ヒ　御尤に存升　乍去余所へ御出被成ても経ハ知らせられす勤メハ成まいしなされ様か御さり升まい　ヒ　夫ハしやんか有る　毎もはくちの跡て酒盛をする時彼の小傘を持ておとつた其はやし物を勤メにせうと思ふ（同）　ヒ　シカ〳〵　ヒ　汝と某と随分わけのきこへぬ様ニ勤メの色に言ふたらハ大事あるまい（同）　ヒ　先それハそう成共なされ経をよめと申ときわ何と被成ます　ヒ　経ハ持てこなんたと言ふ（同）　ヒ　先ニ経かあつたらハ何と被成るゝ　ヒ　そちか様に言ふて何と成物ちや　其時ハとふ成とも言ふ迄よ（同）　ヒ　扨其はやし物ハなんとやらて御さつた　ヒ　あすも通る小傘けふも通り候　あれ見さいたいよ　是見さいたいよト言事ちや（同）　ヒ　成程覚へました　ヒ　是に念仏をませたらハ上〻の勤メてあらふそよ（同）　ヒ　一段と能ふ御さらふ　ヒ　先其小傘を持て（同）　ヒ　畏て御さる　是ハ如何な事　またこりもさせられいて又はくちかな打て傘をかたけておとろふと思召か　ヒ　そふてハない　傘ハ雨ふりハ言ふニ及す日てりニもよい物ちや　是非とも持て来い（同）　ヒ　心得ました（後見サ行持テ出ル）（同）　ヒ　小傘持升た　さあ〳〵来い　ハア　ヒ　誠ニ某故に汝も色〳〵と苦

労をする事ちや　何卒仕合を直して取立てやらふそ　同　御修行被成たらハよい事か御座ろふ　ト言テ二人リ廻ルアトタッテ　イヤ一段の御坊かとおらせらるゝ言葉をかけよふ　ヤアのふ〳〵御坊さま　ハア此方の事て御さるか　いかにも其方の事ちや　そつしなからとれからとれへ行かせらるゝ　一所不住て御さるニ依て何国へ行と申定メも御座らぬ　只諸国修行を致す事て御さる　シカ〳〵　ケ様に御尋申も別の事ても御さらぬ　某一在所と致て少さい堂をこんりう致て御さる　未似合敷いお住持か御さらぬ　何卒此方御出被成て御せハ被成て被下るゝ事ハなりますまいか　それこそ出家の望所て御さる　成程参りませう　あれハ此方の御弟子て御さるか　左様て御さる　在所か少イそふ御さるニ依て御弟子まてハなんとあらふも存ませぬ　御尤に御さる　後ミハちてひらかせませう程に其分ハ御きつかひなされ升な　左右あらハイサ御出被成ませ　何か扨案内の為此方から行かせられい　私から参らふか　一段とよふ御さらふ　イサ御され　同　先お出被成ませ　左右あらハさあ〳〵御出被成ませ　心得ました　誠ニふと言葉を懸て御さるニ早束御同心被成て此よふな嬉敷事ハ御さらぬ　袖のふり合せも多せうの縁とやら申か此事て御さろふ　扨こんりうさせられた堂ハとの様な事て御さる　先三間四面て御さる　定メて本尊も結講に出来させられたて御さろふ　随分何から何迄念を入ました　仏具も御さるか　仏具とハ何を問ハせらるる　仏前ニのふて叶わぬ物の事て御さる　中〳〵何もかもない物ハ御さらぬ　お経も三部経あるいハけこんなこん御用ならハ法花経御さる　夫ハいらぬ物かいろ〳〵御さる　同　シイ〳〵　いらぬ物と仰らるゝハ何とした事て御さる　其様な長い経をよむハ昔流て初心な事て御さる　扨はこなたハ経ハ成ませぬか　愚僧ハ一切の経によまぬ経ハ御さらぬ　経ハ大イ得物て御さる去なから愚知な人の耳に入かぬる物ハ経ちやニ依て師匠か伝へられて南無阿弥陀仏の六字の外ニまたありかたい事をいれてごん経の勤メに致して女童迄も壹人ものこらすみな仏に致ス事て御さる　扨ミ夫ハ御すしやうな事て御さる　愚僧の師匠の申さるゝハそち程経をよむ者ハなけれともかまへて初心な者ニ経をよむな経をよふたらハ勘当ちやト申されたニ依て覚へてハいまするか経を手に取る事も成りませぬ　扨ミ尤な事て御さる　よふすお聞てあ

りかたい事て御さる　ベ　此方ハ合点のよい人ちや　こなたの様な人ハ仏の内てもよい仏に成ると諸経ニも見へました　ア　夫ハ忝ない事て御さる―　ア　イヤ何角と（脱落アリ）　ベ　ハア是て御さるか　ア　左様て御さる　先ツ斯ふ通らせられ　ベ　心得ました　ア　扨在所の衆を呼ませう　ベ　よふ御さろふ　ア　のふ〳〵何れも御さるか　楽屋より立衆出ル　立衆　ベ　是に居り升〳〵〳〵〳〵エイ誰れ殿はや帰らせられたか　ア　只今帰り升た　立衆　ベ　やれ〳〵夫ハ御苦労に存升る　扨御出家を同道して御出被成ましたか　ア　いかにも御供申た　引合せませう　いつれもこふ通らせられ　各　ベ　心得ました〳〵〳〵〳〵　ア　在所の衆を御さる　ベ　何れも不案内て御さる　誠ニ存し寄らす是江参つて御苦労に預り升　各　ベ　よふこそ御出被成ていすれも悦ひ升　ベ　仏法気毒とハ申なからふしきの縁てこそ御され此後ハ皆ミ頼ミ升　よいよふに引廻いて被下　各　ベ　其段ハ私共にまかせて置せられい　ア　いさまつ入院の仏事を始て被下　ベ　成程追付法事を始メませう　何と各にハ何そ御心さしハ御さらぬか　ア　とハ何とした事て御さる　ベ　此様な法事を幸になき人のために布施もつを上ケてとむらハせらるゝ事て御さる　ア　何と上る物ハ御さらぬ　ベ　金銀ニハよらす衣類ても腰の物てもあけさしませ　ア　夫ならハ先ツ身ともハ二親追善の為此刀を上ケませう　ト言テ少刀ヲヌイテ上ケル　立衆　ベ　某ハ理（ママ）生後生の為に是をあけませう　御ゑこう被成て被下　イクタリニテモイロ〳〵カヱテ言ナリミナ真中ニ置クナリ　ベ　何れも御気毒な事て御さる　追付法事を始めませう　立衆四拍子ノ前エニナラフ下ニ居ル　同宿脇正面ニテ傘ヲヒロケ　同　ベ　御勤ニハ傘か入ませう　シテキモヲツフシシシト言ふナリ　ア　御勤御傘か入升か　イヤ有てものふても勤メハ成れ共此傘ニハ子細か御さる　立頭　ベ　シカ〳〵　ベ　師匠か仏法ふそくの時は是をゆすられた　此傘ニハあみたか乗りうつられたニ依てありかたい事て御さる　立頭　ベ　是ハ面白い物に乗りうつられた事て御さる　ベ　惣して船後光傘後光と言ふて御さるニ依て後光かと思召て乗りうつられたと見ました　各　ベ　扨〳〵難有い子細て御さる　追付御始メ被成て被下　ベ　心得ました　両人　ベ　きのふも通る小傘けふも通り候　あれ見さいたいよこれ見さいたいよ　なもたア〳〵　シテ同宿左右ヱアリク向合テハシリコキシテニ同宿日クハセスルシテ同宿ツカ〳〵トトリニユク時　ア　申〳〵いこふ浮〳〵とした御勤メて御さるかありかたい事て御さる　ベ　よふてうもん被成た　経せつニも聴衆のねむるハ悪人としめされた　一ツにハねむりをさまそうと言ふ事又一ツニハしやはて心の浮た者ハ仏に成ても心かいさむ　爰て心

の浮ぬ者ハ仏ニなれとも物かしんきてらうかいやみのよふな仏ニ成るニ依て旦那衆のこゝろをいさめふと言ふ事　是も私てハ無いしやか仏の分言（ママ）てちや　各〳〵扨〳〵難有い事て御さる　シ〳〵是からハ踊り念仏ちや程にこちを見すともみな〳〵立ておとらせられい　ア〳〵大俗の身ておとつてもくるしう御さりませぬか　シ〳〵下ニ斗り居れハ座像に成る立て居れハ立像ニ成る　それ故立て居ツ下ニ居ツすれハとち成共身の自由な仏に成る事ちや　ア〳〵ヤレ〳〵ありかたい事かな　いつれも立てお踊らせられい　各〳〵心得ました　立頭〳〵是ハ難有事ちや（ト言テミナ〳〵タツナリ）　両人〳〵明日も通る小傘　各〳〵なもたア〳〵　両人〳〵今日も通り候　各〳〵なもたア〳〵　両人〳〵あれ見さいたいよ　各〳〵なもたア〳〵　両人〳〵是見さいたいよ　各〳〵なもたア〳〵（拍子トリヲトル其内ニフセ物ヲトリ同宿其時カサニテカクスシテ見合ヲトリ〳〵両人橋カヽリヱ行ニケ入ナリ）　シ〳〵一段の仕合を致た　ちやつと来い〳〵　同〳〵心得ました〳〵　ア〳〵今の御出家ハとれへゆかれた　各〳〵あれへ行升す　ア〳〵扨〳〵腹の立まいて御さる　各〳〵ちやつととらへさせられい　ア〳〵やるまいそ〳〵

シテ　坊主　無地熨斗目　コロモ　角頭巾

アト　同宿　嶋袴　十徳　コウシ

ヽ立衆　長上下

入用　傘

右狂言言合第一ナリ立衆の内へ尼ヲ出ス仕様もアリ其時ハハクヌキテ施物ニスル同宿ヲシテニテモスルナリ印籠巾着ナト腰ニ付其外施物用意スヘシ

解題

〈首引〉の場合

〈首引〉は『天正狂言本』にも『虎明本』にも『保教本』にも、そして『天理本』にもある古い曲である。曲趣としては三流大きく変わることはない。鎮西八郎為朝が播磨の印南野で鬼に出くわし、姫鬼に喰初させたい親鬼は勝負をさせる。腕押し、足押し、最後は首に縄をかけて首引きとなる。応援の鬼達もエイサラ〳〵と引くが、アドの為朝が首の縄を急にはずして鬼をうち倒して逃げ入る。勇猛な武将と鬼の力くらべ、姫との勝負、これは恰かも女と男の引き合いを思わせて面白いが、ついには鬼達の引張る力を逆手にとって難を遁れる人間のしたたかさも感じさせる。

今、愛知県立大学附属図書館蔵の『和泉流秘書』[1]が、和泉流の狂言台本の『天理本』[2]『和泉家古本』[3]『波形本』[4]『型付本』[5]『元喬本』[6]『雲形本』[7]とある中でどこに位置するものなのか、本文の校合によって明らめようとしたものである。

(1)

天理　たゞ今みやこへまかり上ルト云シカ〳〵
波形　此度罷登と存ル誠に国元へハ久敷で登るによつて定而待かねて居て何もよろこふでござろふ
型付　只今国元へ登るト言テ廻ル仮初の様に存たに久〻逗留をした嘸いつか〳〵待てゐるて有ふ
元喬　唯今本国(ミヤコ)へ罷登る先急て参らふ誠にかりそめの様に存たに久〻逗留をした国元(定而都ニハ)ニハ嘸いつか〳〵待てゐるてあらふ
秘書　只今都へ登る先急て参ふ誠に月日の立ハ早い物しやかり初の様に存たに久敷う逗留した定而都てハ待て居るて有ふ
雲形　只今都へ登るまづ急で参うト云テ右へ廻り掛シカ〳〵ニテ順ニ廻リ本座に留誠に仮初の様に存たに久〳〵逗留したさだめて都には待てゐるであらう

(2)

天理　やうやう罷のぼるホドニはりまのいなみ野じや
波形　イヤ是ハ広〻とした所じやがどこじやハア爰ハ播磨のいなみのじや
型付　何角トヲ言ひやう〳〵ヲ言野へ出た広いト云何と言所ト云思ひ出たはりまのいなみ野て有ふ
元喬　イヤ〔何かと云内ニ〕こりやひやう〳〵と打ひらいた野へ出た扨〻広所しや何と云所しやしらぬ夫〻はりまのいなミ野てあらふ
秘書　イヤ何角言うちにひよふ〳〵と打ひらいた野へ出た扨〳〵広い処ちや是は何と言所ちや知らぬヲ、夫〳〵これハ張り摩の稲見野しや

(3)

雲形　いや何かといふ内に是は眇〻とうちひらいた野へ出たさて〳〵広所ぢや是は何といふ所ぢやしらぬヲ、それ〳〵播磨の印南野ぢや

天理　いや思ひだいタ事があるわたくしのおとひめがいまだ生物をくうた事がなひホドニくいぞめにくわせうと存ルト云テやいおのれきけそれがしのおとひめをもつタガいまたいき物をくわぬくいぞめになんぢをくわせうと思ふがひめにくわれうか又それがしにくわれうかと云

波形　いかさま見れはよい若イ者じや某壱人娘を持たが終に生物を喰せぬ是にくわせたいかなんと身共にくわれうか又ハ娘にくわれうか

型付　とう有ふ共一かみにせふ去ながら某かひさうの姫が有是に喰れふか但しをれかくわふか

元喬　とうあらふ共一かミにせふ去乍某か秘蔵の姫（が爰ニ思ひ出た事か有）かある是（を持たか終ニいき物をくわせぬくひ初ニくはせたいか姫ニくはれうか但某かくはうか）にくわれうか但おれかくわふか

秘書　どふあらふ共一トかみにしよふか爰に思ひ出た事か有某秘蔵の姫を持た終に生物を喰ぬ喰初にくわしたいか姫に喰りやふか但シ某か喰ふか

雲形　どうあろふとも一かみにせうが爰におもひ出した事かあるそれがし秘蔵の姫を持たが遂生物をくわせぬ咋初にくはせたいが姫にくはれうか但某かくはうか

(4)

天理　にくいやつじや　それがしがくうてはたさう

波形　とかくおのれはにくいやつじや此上は身共が一口にぶくするそ

型付　とかく此上ハは身共か喰ふ

元喬　とかく「色〻とぬかしをる」らちかあかぬ身（某か只一かミ取てかまう）ともかくわふ

秘書　兎角色〳〵とぬかしをる埒があかぬ某か只壱かみに取てかまふ

雲形　兎角色〳〵とぬかしおる埒が明ぬそれがしが唯一かみに取てかまう

(5)

天理　むかしより鬼神にわふだうなし卜申せばなにのとがもなひものをやみ〳〵と命をとらうとおほせらるゝハめいわくで御ざるなんぞせうぶをしてまけて御ざらばその時命をとらせられてくだされいと云　これハなんぢか云ごとくにきじんにわうだうなひと云もうそでなし又日暮にとをつタト云事斗のとがじやホドニさらばミともせうぶをせうと云

波形　昔より鬼神におうどうなしと云事がござる此上はなんぞ勝負を致て私のまけましたらハぶくされいム、是ハ尤な事を云いかさま鬼神にわうどうハない夫ならハ勝負にハ何をするぞ

型付　昔から鬼神に横道無と云て科なうてハふくせられまい何成共勝負をして負たらハふくせられふそ

是は尤しや何をする卜云

元喬　昔から鬼神に横道なし〔と〕云て〔ハ〕罪〔の〕ない者ハふくせられまい何そ勝負をして負たらハふくせられうそ

是は尤しやして勝負には何をするそ（目録ニ此所を通たと云てさのみとかてもない　さうあらハ勝負をせうか）

秘書　昔から鬼神に横道無し迚罪の無イ者を腹クせられまい何そ勝負をして勝たならは腹くせらりやうそ

是ハ尤ちやいか様日暮に此処を通たと言ふてさのみとがと言ふてハない左右有ハ勝負ニハ何をする

雲形　昔から鬼神に横道なしといへば罪のないものは服せられまい何ぞ勝負をして負たらば服せられうぞ

是は尤ぢや日暮に此所をとほつたといふてさのみ科でもないさうあらば勝負にせうが何をするぞ

(6)

天理　是もきこへタさらばひめにだんかうせう

波形　ム、尤しやさあ〳〵姫早ふ出て腕おしをせい

型付　尤卜言さあ姫あれとうて押をせい

元喬　是も尤しやさあ〳〵あれとうておしをせい（さらは姫と談合せう是〳〵そちにくはる、からハおぬしと勝負をせうと云何と有う）

秘書　是も尤しや更ハ姫と談合しよふヤイ〳〵そちに喰る、からハおぬしと勝負をしよふと言か何と有ふ

雲形　ムウ是も尤ぢやさらば姫と談合せう是〳〵そちにくはる、からはおぬしと勝負をせうといふが何とあらう

(1)(2)は曲の初め名乗の部分である。(1)の「国元へ」とするのは『波形本』『型付本』『元喬本』であり、『元喬本』の訂正が「都へ」としていて『和泉流秘書』と『雲形本』に一致して『天理本』に戻っている。

(2)は六本とも「播磨の印南野」は共通するが「眇眇と打ひらいた野」は『型付本』『元喬本』『和泉流秘書』『雲形本』の四本で、『天理本』『波形本』には記さない。

(3)は暮になれば人の通らぬ野に為朝がさしかかり鬼に呼び留められる所である。『元喬本』の訂正前の「とうあらふ共一かミにせふ去乍某か秘蔵の姫かある是にくわれうか但おれかくわふか」は『型付本』に一致し、『元喬本』の訂正後は『和泉流秘書』『雲型本』に一致する。

(4)についても(3)と同様のことが言える。『元喬本』の訂正前は、「とかくらちかあかぬ身ともかくわふ」は『型付本』に近似するし、訂正後は『和泉流秘書』と『雲形本』に同じである。『元喬本』を紹介した注6の解題にも「元喬以降、元貞・元業の二代によって大幅に改訂され『雲形本』に集約された」(67頁)とあるに逆らわない。

(5)は「鬼神に横道無し」といふ中世に広く使われた諺を六本ともに使い、『天理本』『波形本』は重ねてまで使う。『型付本』以下の四本は一度の使用である。『和泉流秘書』が「勝負をして勝たならは」と他台本と異なるのは「腹くせらりやうそ」の「らる」を「尊敬」に解したらしいからである。「負たらば」の文脈では「受身」となる。『元喬本』の訂正後は『雲形本』に一致する。

(6)も一目瞭然であるが、『元喬本』の訂正前は『波形本』『型付本』に一致し、訂正後は『雲形本』に一致する。そして『和泉流秘書』は『波形本』よりも『雲形本』の方に近い。

以上〈首引〉の和泉流台本を『元喬本』の訂正箇所を中心に諸本を比較検討した結果、『和泉流秘書』は『波形本』までは遡れないが、『元喬本』と同時代か、少し後、『雲形本』よりは以前の山脇家の台本と位置づけられる。

注

1 『和泉流秘書　五』愛知県立大学附属図書館蔵　所収

2 『天理図書館善本叢書　狂言六義　上』所収

3 『日本庶民文化史料集成　第四巻　狂言』に〈首引〉は所収しない

4 『波形本　十二』狂言共同社蔵　所収

5 『型付本』(仮称)書写年代不明　『狂言』第八五号(昭和41・1)に初めて紹介されたもの。狂言共同社蔵。池田広司氏は「波形本より古くはないが、江戸中期から末期にかけて完備された後期台本への一つの過渡期の狂言を示している貴重な書であるという」(『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』85頁)と記している

6 『六儀　聞改』狂言共同社蔵。『武蔵野女子大学能楽資料センター紀要13号』に翻刻

7 『狂言六議　十一』狂言共同社蔵　所収